

SHOW HEYシネマルーム

ガールフレンド・エクスペリエンス

2009年・アメリカ映画
配給/東北新社
77分

2010(平成22)年6月17日鑑賞 試写会・テアトル梅田

Data

監督・撮影・編集: スティーヴン・ソダーバーグ
出演: サーシャ・グレイ/クリス・サントス/フィリップ・アイタン/グレン・ケニー/ティモシー・デイヴィス/デヴィッド・レヴィーン/マーク・ジェイコブソン

👁️👁️ みどころ

社会問題作と娯楽作の「二足のわらじ」を履くスティーヴン・ソダーバーグ監督が、1時間2000ドル(約18万円)の高級エスコート嬢の生態に注目。全米NO.1ポルノ女優の起用に一瞬頭クラクラ。その肉体は?そのサービスは?

そんな期待は当然だが、クライアントと恋人の境目とは?本作に見る高級エスコート嬢のビジネスモデルとは?どうも、そんな論点が本作本来のテーマ。すると、肝心のエッチ度は・・・?

* * * * *

ソダーバーグ監督の着想と着目女優に着目!

私はずっと昔にビデオで『セックスと嘘とビデオテープ』(89年)を観たが、その監督がその後オールスターを揃えた『オーシャンズ11』(01年)のスティーヴン・ソダーバーグ監督であることを長い間知らなかった。また、アカデミー賞監督賞を受賞した小難しい映画『トラフィック』(00年)もソダーバーグ監督だったことを知り、その幅の広さにびっくりしたものだ。そんな風にソダーバーグ監督についての理解が深まると、その後の『グッドナイト&グッドラック』(05年)や『チェ』2部作(08年)のような社会問題提起作と『オーシャンズ12』(04年)や『オーシャンズ13』(07年)のような娯楽大作との「二足のわらじ」のはき方にも納得。

そんなソダーバーグ監督が2009年に全米NO.1ポルノ女優を起用して高級エスコート嬢チェルシーの生態を!その女優の名はサーシャ・グレイ。時給2000ドル(約18万円)という超高級コールガールのサービスとは?そして、ソダーバーグ監督が迫る、

彼女の私生活を含む生態とは？そんなソダーバーグ監督の着想と着目女優に着目！

クライアントと恋人との線引きは？

本作はソダーバーグ監督がドキュメンタリータッチでチェルシーの生態を追うものだが、他方それを客観化するため（？）インタビュアー（マーク・ジェイコブソン）によるインタビューや女友達との腹を割った（？）会話、そしてネットを駆使することによって自分の価値（値段）を高めるためのエロチック鑑定家（グレン・ケニー）との交渉などのシーンが随所に挿入されているから、わかりやすい。

本作最大の「論点」は、チェルシーの仕事内容を一切承知しながら「恋人」としてマンハッタンの高級アパートで同棲している男クリス（クリス・サントス）の存在。つまり、クライアントとの楽しい会話、食事そしてセックスは高額な料金の代償として当然だと考えているチェルシーにとって、クライアントと恋人との線引きはどこに？ということだ。クリスはエリート相手のスポーツジムに時給125ドル（約1万円）で勤め、パーソナル・トレーナーをしている男。2008年11月のアメリカ大統領選挙を控えてリーマンショックが起きた今、あらゆるビジネスにおいて先行きが不透明なため、クリスも将来設計をたてるのに余念がない。そんな状況下、男たちだけのラスベガス旅行へ参加したことによって少しチェルシーとの関係がギクシャクし始めていたが、ある日チェルシーが信奉する「人格学」上ピッタリのクライアント、デヴィッド（デヴィッド・レヴィーン）が現れたため、2人の関係は・・・？

それぞれしっかりした自分の人生観をもっているアメリカ人だけに、デヴィッドをめぐるクリスとチェルシーの夫婦ゲンカのような論争は興味深い。しかし、所詮クリスとチェルシーの「良好な関係」はいつまでも続かないもの・・・？そんな本作最大の「論点」を自分のことのように感じる人は少ないだろうが、映画として観れば、その「論点」は面白い。

こんなビジネスモデルが、本当に成立？

チェルシーは今22才。私にはよくわからないが、彼女が休日（？）に買い物に行くドレス、シューズ、ジーンズ、ランジェリーなどの店はいずれも超高級店。そして、彼女が語るクライアントについてのモノローグを聞いていると、彼女がいかにクライアントに印象よく思ってもらえるか、少しでもその好みに合わせようとしているかという姿勢が伺われるから、並みのサラリーマンとは全然違う次元の努力を続けていることは一目瞭然。彼女はインタビュアーからの「競争相手は恐くないか」との質問に対して「全然」と答えていたが、ある背の高い競争相手の出現を気にしているところを見ると、本心では自分の魅力の衰えへの心配があることは明らか。

弁護士の目から面白いと思ったのは、彼女がどの組織にも属さず独立してエスコート業

を行い、クライアントとはすべて直接契約というビジネスモデルを貫いていること。高級エスコート嬢=コールガール=売春婦は古今東西を問わず存在するが、ヤクザを含むピンハネ組織が介入しないチェルシーのようなビジネスモデルは本当に存在するの？チェルシーのような商売には客との間で、あるいは競争相手との間でさまざまなトラブルがつきまとうはずだが、そんな場合チェルシーは一人でどう対処しているの？本作に登場するチェルシーのクライアントは温厚でいい人ばかりだが、いくら「人格学」にのっとり誕生日を調べたり、エスコート初という客はお断りだとしても、危険排除のためにはやはり何らかの組織の援助が必要なのでは？エスコート嬢がこれほど魅力的な職業だとしたら、第2、第3のチェルシーが次々と登場するはずだが、実際にはヤクザとのくされ縁をはじめとして、チェルシーのような独立独歩のビジネスモデルの成立は難しいのでは。

エッチ度期待は肩透かし！

全米NO.1ポルノ女優が主演！時給2000ドルの高級エスコート嬢の生態とは？そんな前宣伝を聞くと、当然期待度が高まるのがエッチ度。事前のネット上におけるコメントでは「今回公開された日本版予告編でサーシャはポルノ映画以外で初めてラブシーンに挑戦したが、その場面ではまさにポルノ映画から出てきたかのようなテクニックを披露した。」というものであったから、その期待度は高まるばかり？しかして、その実態は？

正直言うと、それは「肩透かし」と言わざるをえない。高級エスコート嬢の肉体とは？そのサービスとは？ソダーバーグ監督はなぜかそこらあたりをあまり突っこまず、チェルシーとクライアントとの会話に重点を置いている。もちろん、最初のクライアントの間では互いを知り合うための会話が必要かもしれないが、そもそもクライアントがチェルシーに求めるものはセックス。映画の中では一人チェルシーとの会話だけで満足し、セックスなしのクライアントもいたが、それはごく例外のはずだ。

聞くとところによれば、高級コールガールを求める金持ちの医者や弁護士そして会社役員達には変態気味のセックスやSMプレーを求める客も多いらしいが、本作のクライアントにはそんな傾向は全く見られず、経済を語りアメリカの行方を語るいいクライアントばかり。しかし、そのため期待していたエッチ度が肩透かしになったのは大いに残念だ。そうになると、若くかつ筋肉ムキムキマンのクリスとの濃厚なベッドシーンに期待したが、残念ながらそれも肩透かし。せっかく全米NO.1ポルノ女優サーシャ・グレイを起用したのに、スティーヴン・ソダーバーグ監督はなぜその方面でもっとサービスしてくれなかったの？

2010（平成22）年6月18日記